

十二時頃、七合目の山小屋、花小屋にて昼食を頂き、力を蓄え再び歩きます。そして十五時頃に八合目の元祖室に到着しました。夕食のカレーを頂き翌日の山頂への登拝に向けて、十八時頃に就寝しました。

最終日、御来光を拝む為に真夜中の一時に起床し、準備を整え山頂を目指し元祖室を出発。この日も気温が高く、本来ならば夏場でも寒い山頂付近が異常なくらいに暖かい状況でした。山頂間近になると酸素も薄くなる為、呼吸も荒くなり必死に大きく息を吸いまくります。次第に他の登山者も多くなり、列を組みながら暗い岩肌の山道を登ります。

そして明け方の四時頃に参加者全員で富士山頂に到着することができ、火口が見下ろせる場所での鎮魂の法楽を行いました。鎮魂の法楽を行っている理由として、明治時代に「魔仏毀釈」が行われ

た際に、それまで富士山に祀られていた仏像の頭を切り落とし、火口に捨てられてしまい、そうした仏像に対する鎮魂や、人間の身勝手な行為に対する懺悔の意味を込めて法楽を行い、修行会の根本的な考えとして行っているそうぞうです。

四時半頃に無事に御来光を拝むことができました。しかし、御来光に雲がかかっているように見ると、大先達の安田法務部長様が「万歳三唱をしよう」とおっしゃり全員で万歳三唱をする、なんと雲が二つに割れ御来光をはっきりと拝むことができました。私はその美しい光景を見て、感動と大きな達成感と両親への感謝の気



雲が二つに割れて御来光を拝むことが出来ました

持ちなど、言葉では言い表せないたくさんの感情が心に溢れました。

御来光を拝んだ後、下山道を使って麓まで戻ります。下山の最中に見えた、朝日によって光輝く富士五湖や富士吉田市内は、とても幻想的でした。北口本宮富士浅間神社にて成満の法楽を行い、今回の修行会は終了となりました。

今回の修行会に参加させて頂いて私は改めて、人と人の繋がりの大切さや、自然の偉大さ、そして

てなによりも両親への感謝の気持ちを覚えました。山頂まで歩ける丈夫な足で生まれてきたこと、登拝で素晴らしい景色を見ることができたこと、この素晴らしい修行会に参加できたこと、その全てが両親という存在があったことだと、改めて感じる事ができました。

今後、この感謝の気持ちと今回の登拝修行で学んだことを忘れずに日々精進していこうと思えます。

合掌

厄年を過ぎた 御信徒の皆様へ

六十才の厄年を過ぎたならば 一年一年を 暑さ、寒さを

七十才を過ぎたならば 春夏秋冬を 一日一日を

八十才を過ぎたならば 春夏秋冬を

九十才を過ぎたならば 一日一日を

気を付けられ 日々を大切に 圓滿にお暮し下さい

当山では皆様の (身体健全) (寿命長久) を祈念して 福壽圓滿の 御護摩を お申し受け致しております。

第九回深川成田山 霊峰富士登拝修行記

法務課 岡野 忠良



富士山中に響き渡る「登山囃子」。大きな声を出しながら、私たちは富士山頂に向けて歩みを進めました。

平成三十年七月十七日(火)から十九日(木)にかけて、私は成田山東京別院深川不動堂様で開催された、「第九回深川成田山霊峰富士登拝修行」に参加させて頂くことができました。私は歩いて富士山に登ること、他の寺院で開催される修行会に参加することが初めての経験だったので、不安と緊張が入り混じる

中での修行会となりまして。初日は富士吉田市にあるお宿、簡屋に十七時頃集合となり、私は高尾山から向かい深川不動堂様の職員の方々と合流しました。職員の中に私の大先輩時代の同級生がおり、久しぶりの再会で喜びと、それまであった不安と緊張が和らぎました。その後の夕食で、参加者の皆さんと親睦を深め初日を終わりました。

翌日、四時四十五分に簡屋を出発、北口本宮富士浅間神社にて参拝した後、一合目から八合目の山小屋、元祖室までの登拝修行が行われました。山中の各御社にて参拝をし、職員の方の説明を聞き、登拝の最中に「登山囃子」というものを唱え

ました。昨晚に初めて「登山囃子」を知った私は同級生から教え方を教わり、独特な歌い回しに悪戦苦闘したが、登拝中に「登山囃子」を唱えるのは新鮮さがありました。高尾山修験道の登拝修行では、「懺悔懺悔 六根清浄」と「掛念仏」を唱えますが、「登山囃子」はまた違った雰囲気がありました。この「登山囃子」は過去に行われた修行会で、太鼓打ち師の富田和明さんという方が参加をされた際にお囃子を教えて頂き、出来上がったそうです。

九時頃に五合目の佐藤小屋までやってきました。この日は猛暑で、佐藤小屋の方も「今日は異常な暑さだよ」と半袖姿でおっしゃっておりました。ここまでは木々が生い茂る山中を登拝してききましたが五合目からは日差しを遮るものも減り、太陽の日差しを直に浴びながら砂利道を歩き続けます。八合目を目指し歩いていく最中、早朝から歩いて

きた疲れなのか、段々と足取りが重くなり、足を上げる度に太ももに痛みが走ります。途中何度も「立ち止まりたい、休みたい」という考えが頭をよぎります。そんな時だからこそ一緒に登っている参加者の方々に感謝の気持ちを感じます。



火口を見下ろす場所で鎮魂の法楽を執り行った。

辛いと感じる時お互いに励まし合い、協力し合うことで頑張ろうという気持ちで湧き上がり、重かった足取りがまた前へと進むことができました。また、休憩の最中に参加者の方々と談笑するのも、疲れた心を癒してくれる薬になりました。